

# 第36回 TKC東北会秋期大学 in あきた

■とき：平成27年9月10日(木) ■とこ：パーティギャラリーイヤタカ



大会テーマ

## 日本人の底力。

秋田県支部が担当した秋期大学には約400名の会員・職員等が参加。建築と工業デザインの分野で世界的なプロフェッショナルの2人が講師として招かれ、日本人に備わる底力を語った。

### 同空間で2人の話が聞ける奇跡

長谷部光重実行委員長が開校を宣言。「本日は、世界的に活躍する先生方をお呼びできました。同じ空間でお二方の話が聞けるのは奇跡です。しかし奇跡には強い思いと信頼関係が必要です。実行委員のおかげでここまで漕ぎ着けることができました。今日1日、秋田をご堪能ください。」



長谷部実行委員長

大藤正樹会長の挨拶に続いて講演が行われた。第1講は、サントリ美術館や歌舞伎座等を手がけた建築家で東京大学教授の隈研吾氏による「場所の力」。第2講は、フェラーリのデザインディレクター等を歴任し、山形・東京・ロサンゼルスを拠点に活躍する工業デザイナーの奥山清行氏による「これからの100年をデザインす



大藤会長

講演終了後、秋田竿燈囃子が奏でられる中、小町娘と秋田舞妓が参加者を出迎えてレセプションが始まった。大藤会長、TKC角一幸社長、秋田銀行湊屋隆夫頭取が挨拶した。湊屋頭取「金融円滑化、事業性評価を踏まえ、今後もタイムリーな協力をお願いします。」

る」。日本人の感性を生かして世界を股にかけて活躍する両氏のエピソードやビジョンに参加者は興味深く耳を傾けていた。

### 秋田銀行湊屋頭取が挨拶

旬の郷土料理を味わう中、飯野明日香さん(ピアニスト)、小杉まりさん(バイオリン)などによるミニコンサートに参加者は聴き入った。中締めを秋田県支部長の高橋喜晃会員が務め、1本締めで大会はお開きとなった。



実行委員による1本締め





## 場所の力

講師 隈 研吾氏(建築家)

## 大災害をきっかけに時代が変わる

時代の変わり目は、大災害がきっかけになっているといわれます。1755年にリスボンで大震災があり、約6万人が亡くなりました。神様に頼らず産業の力で



自然への畏敬の念を持つという隅氏

人間を救おうと近代が始まりました。次が1871年のシカゴの大火です。街のほとんどが焼けました。そこでアメリカはコンクリートや鉄の建築技術を発展させ、20世紀の繁栄を築きました。2011年の東日本大震災はこれに続く変わり目です。どんなに立派な建物を作っても自然には勝てない。自然への畏敬の念を失ってはならな

人間を救おうと近代が始まりました。次が1871年のシカゴの大火です。街のほとんどが焼けました。そ

ここでアメリカはコンクリートや鉄の建築技術を発展させ、20世紀の繁栄を築きました。2011年の東日本大震災はこれに続く変わり目です。どんなに立派な建物を作っても自然には勝てない。自然への畏敬の念を失ってはならな

いという教訓を私たちに与えてくれています。

地域には祖先の知恵が溢れています。そのことに気づいたのは、栃木県の馬頭広重美術館の設計を依頼されたときです。この美術館の背後には里山があり、近くに神社もあります。かつて人々は経済資源の里山を中心に生活していました。私が来たときは荒れ放題でしたが、里山を見て、神社にお参りできるようなアプローチを提案しました。材料も地元の杉や和紙を使って、地元の職人さんに建ててもらい、非常に喜ばれました。こうした試みは世界中で支持されています。

私の夢は、誰もが木で建築できるような世の中です。その一環で国産スギを使った三角形の積み木を広めるプロジェクトを進めています。環境に優しく、場を大切にすべきこれからの時代にふさわしい子供達が数多く育ってほしいと願っています。

## これからの100年をデザインする

講師 奥山清行氏(工業デザイナー)

## 五重塔のような避難塔を提案

東日本大震災の後、宮城県の石巻で学生達とボランティア活動をしているとき、津波を回避する高台がなくて困っているという話を聞いて、地上20メートル、直径200メートルの人工高台の絵を描きました。インターネットなどITをフルに活用して、週3日くらいはここで仕事をして、2日は高台をおりてミーティングや現場に行くというスタイルがあってもいいのではないかと。街の細かい設計をして、いろんなところに提案しています。事実、コンパクトシティは世界の潮流です。車に乗らずとも生活できるような範囲内で人が暮らせるのが理想的という考え方が広がっています。

人工高台に移転できないという住民の対策としては、避難塔をデザインしました。大震災の時、地震が起きてから津波が来るまで約15分。この間に、仮に女性が子供を背負って老人の手を引いて移動で

きる距離は500メートルが限度です。だとしたら、1キロごとに数百人が上れる避難塔を建てればよいという仮説に基づい



変化に対応したものづくりを実現するという奥山氏

て、提案しています。そのときに目標となるのは、まずコストが安いということ。それから100年もつということ。そして、美しいということ。五重塔のように、普段昇ることはないけれども、それがあつて住民が心安らかに日々の生活を送れるようなデザインをイメージしています。

これからも変化に対応し、人のためのものづくりを提案・実現し続けてまいります。